

# アガウヌの聖マウリス修道制の成立とその展開

## ー・中世初期のブルグンド修道制に関する政治史的・教会史的考察・ー

徳 田 直 宏

Tokuda, Naohiro

### はじめに

ジュネーブ湖のローヌ河口部分から上流のヴァリス地方のアガウヌに515年設立された聖マウリス修道院の起源とその修道制について、M.ブッソン(1913年)<sup>1)</sup>、M.レイモン(1926年)<sup>2)</sup>およびJ.-M.トゥリラ(1954年)<sup>3)</sup>の研究のほかは、本格的なものは存在しない。ブッソンは同修道院の創設期の諸史料に検討をくわえ、かれが偽文書とする同修道院設立文書以外の諸史料の校訂版を発表し、レイモンは同文書の信憑性を立証し、トゥリラはブッソンが史料の乏しさから検討を差しひえた問題に多角的な考察と批判を加え、ブッソンを補完する研究成果を発表している。初期の同修道院研究は、史料の乏しさの限界もあり、現段階では両者を越える成果は困難と言わなければならない。したがって、今世紀後半、同修道院の研究は、F.プリンツ(1965年)<sup>4)</sup>がフランクの文化史・社会史的視点から、同修道制のガロ・フランク聖界への流布の問題を考察し、F.マセ(1971年)<sup>5)</sup>とG.モイーズ(1973年)<sup>6)</sup>はブルグンド修道院史における同修道院の位置づけを追求し、また、H.アントン(1975年)<sup>7)</sup>は、偽文書とされた同修道院宛の教皇エウゲニウス1世の特許状の信憑性を立証して、その史料価値を確定した。そして、最近では、M.ツフェライ(1988)<sup>8)</sup>がカロリング期以後の同修道院所領を研究対象とし、ガロ・ブルグンド期とメロヴィング期における所領の所在を指定して、中世中期にいたる同修道院領の連続性を明らかにしている。

本稿では、中世初期の修道院と聖俗両権力との関係が、聖俗諸勢力が交差するブルグンド東南端では、どのような状況であったかを明らかにするために、上述の研究成果をふまえて、聖マウリス修道制の特殊性を明らかにしながら、視点を創設期の同修道院とガロ・ブルグンドの聖俗両権力との関わりに置いた。

尚、本稿では、創設期の同修道院関係諸史料は、ブッソンが著書“Monasterium Acaunense, Fribourg 1913”のなかに収録している校訂版を用いた。

[注]

- 1) M.Besson, Monasterium Acaunense, Etudes critiques sur les origines de l'Abbaye de St-Maurice en Valais, Fribourg 1913.
- 2) M.Reymond, La Charte de saint Sigismond pour Saint-Maurice d'Agaune 515, Revue d'histoire suisse, t.VI, 1926.
- 3) J.-M.Theurillat, L'Abbaye de Saint-Maurice d'Agaune, Des origines à la réforme canoniale 515-830, Sion 1954.
- 4) F.Prinz, Frühes Mönchtum im Frankenreich, Kultur und Gesellschaft in Gallien, den Rheinlanden und Bayern am Beispiel der monastischen Entwicklung (4. bis 8. Jahrhundert), München-Wien 1965.
- 5) F.Massai, La > Vita patrum jurensium < et les débuts du monachisme à Saint-Maurice d'Agaune, Festschrift B.Bischof zu seinem 67. Geburtstag, Stuttgart 1972.
- 6) G.Moyse, Les origines du Monachisme dans le diocèse de Besançon (V<sup>e</sup>-X<sup>e</sup> siècles), Bibliothèque des Chartes, Revue d'érudition publiée par la société de l'école des chartes CXXXI, Paris 1973.
- 7) H.H.Anton, Studien zu den Klosterprivilegien der Päpste im frühen Mittelalter, Unter besonderer Berücksichtigung der privilegierung von St.Maurice d'Agaune, Berlin-New York 1975.
- 8) M.Zufferey, Die Abtei Saint-Maurice d'Agaune im Hochmittelalter (830-1258), Göttingen 1988.

[I] マウリス修道院設立(515年)以前のヴァリス地方の聖マウリス崇敬

1. エウケリウスの『アガウヌの殉教者たちの受難』

『アガウヌの殉教者たちの受難』“Passio martyrum Acaunensium”には、7世紀から13世紀までに作成された二種類があり、ひとつはマルティニ司教サルヴィウスに捧げられたリヨン司教エウケリウス(Eucherius, +450)の著であり、いまひとつは名称不詳の修道士が前書に修正を加え、エウケリウス死後の事件をも挿入した校訂本であった。<sup>1)</sup>

エウケリウスが伝えるマウリスの殉教事件とは、3世紀末期皇帝ディオクレティアヌスの僚帝マクシミアヌスがヴァリスの地マルティニ(Martigny, 別名Octodurus)から、アガウヌ近くのヴェロリエ(Vérollez)に駐屯するキリスト教徒のテーベ人の軍団に対して、

棄教を拒否するキリスト教徒たちの弾圧を命じた。弾圧の拒否ごとに、テーベ人兵士を十分の二つ処刑する”decima”の刑が執行された結果、軍団全員が処刑された。被処刑者のなかに司令官のマウリス、下士官のエクスペリウス(Exuperius)および”Senator militum”職のカンディトゥス(Candidus)が含まれ、これに北方のアール地方(Aar)の城砦の町ソロターン(Solothurn)で、退役軍人ヴィクトル(Victor)とウルズウス(Ursus)も殉教者となった。4世紀後半、マルティニ司教テオドルスがヴェロリエで、かれらの遺骨を発掘し、それを奉ずる墳墓教会・バシリカを建た結果、当地が巡礼の地となった。<sup>2)</sup>

エウケリウスの書が、515年の聖マウリス修道院の献堂・祝別式のヴィエンヌ司教アヴィトウス(Avitus)の説教”Homilia Sancti Avitii”<sup>3)</sup>と6世紀初頭の『ジュラ諸修道院の教父たちの伝記』”Vita SS.Patrum Iurensium”のなかで言及されており、<sup>4)</sup> 同書の執筆時期は早くとも、510年代半ば以前であり、ブッソンはその時期を、425年から450年にもとめ、テオドルスによる同遺骨の発見と墳墓教会建設を360年から370年までの時期としている。<sup>5)</sup>

名称不詳の修道士による挿入箇所は、殉教者のひとり聖インノケンティウスの遺骨がローヌ河の氾濫で地表に現れ、それをジュネーブ司教ドミティアヌス(475-500年在職)、アオスタ司教グラトウス(451年ミラノ教会会議出席)およびマルティニ司教プロタジウス(5世紀中期在職)らの手によってアガウヌの殉教者たちの墳墓教会への奉遷式をとまなう改葬を伝えていており、ブッソンはこの写本の制作時期を520-30年であるとする。<sup>6)</sup>

## 2. アガウヌの殉教者たちの崇敬とその起源

つぎにエウケリウスの書と聖マウリス崇敬との間に、どのような関連が認められるのかという問題を検討することにしよう。

東南ガリアのセナトール高級貴族家門に属したエウケリウスはレランスで修道生活を経験して霊性関係の文筆活動を展開し、434年にリヨン司教の叙階をうけた。4世紀前半から5世紀前半にかけて、リヨン首都司教座の影響力で、ガリア東南部の司教座組織は形成期に入っており、そのことはエウケリウスの二人の息子、サロニウス(Salonius)がジュネーブ司教に、ヴェラヌス(Veranus)がアルプス＝マリティーム(Alpes-Maritimes)のヴァンス(Vence)司教となったことから推定しうる。H.ビュトナーはエウケリウスの執筆時をサロニウスのジュネーブ司教在任期と重ねあわせる。<sup>7)</sup> かれの情報源は文書史料ではなく、アガウヌへ自らの巡礼による現地直接取材であり、<sup>8)</sup> 遺骨の発掘者マルティニ司教テオドルスから初代ジュネーブ司教イザック(Issac)を経て、後者から聞いたという伝聞史料にもとづくものであり、したがって、同書は歴史物語とも、<sup>9)</sup> また、文学的頌詞

"un panégyrique"の性格をもっている。<sup>10)</sup>

エウケリウスの執筆の動機が当時のヴァリス地方の聖マウリス崇敬の隆盛を、かれの直接体験の結果であったのか、それとも、かれの書が同崇敬の隆盛の契機となったのか、この間は、4世紀末期、西方教会における聖人崇敬の信仰形態の流布がミラノ教会の司教アンブロジウスに求められ、しかもかれの影響力がガリアの東南部に及んでいたことから、前者の主張が正しいと言えるであろう。

386年アンブロジウスが神の啓示"revelatio"によって、皇帝ネロの時代に殉教した双子の幼児の殉教者ゲルヴァジウス(Gervasius)およびプロタジウス(Protasius)の遺骨を発見し、このことが正統派のアリウス派に対する勝利の象徴となった結果、この聖遺物の発見が西方教会におけるかれの威信を高め、ガリア諸司教座はこの聖遺物をもとめ、それを奉ずる多くのバシリカを設立している。<sup>11)</sup>

後述する聖マウリス崇敬とジギスムンドとの結びつきは、アリアニズムに対するジギスムンドの勝利の象徴となり、かれの正統信仰の証左となった。アガウヌの殉教者の聖遺物の発見者テオドルスはアンブロジウスの側近であった事実は、<sup>12)</sup> 聖遺物崇敬に関して両者の間に何らかの繋がりが想定される。

### 3. 515年以前のアガウヌの修道院存在説

アガウヌには、ジギスムンドによる515年の聖マウリス修道院設立以前に共住制の修道士集団が存在したか、否かの問題を検討しておこう。

考古学的にもその存在が立証されている、<sup>13)</sup> テオドルスが設立したアガウヌの殉教者たちの施設は、エウケリウスの書によれば、バシリカ(墳墓教会)であった。しかし、アヴィトウスが515年のアガウヌにおける説教"Homilia"に、かれ自ら記した表題「殉教者の修道院の"innouatio"にあたって、アガウヌの聖人たちのバシリカで語られた説教」"Dicta in basilica sanctorum Acaunensium, in innouatione monasterii ipsius vel martyrium."の言葉は文字通り解釈すれば、バシリカでのアヴィトウスの説教は修道院の"innouatio"改修が完了したと理解しうるものであり、それゆえに、515年以前にアガウヌにおける修道院の存在が、すでにジギスムンド以前のガロ・ロマン時代に確認され、同修道院の同ブルグンド王による創設説は否定される。トゥリラは修道院の存在を証言する史料として、『聖セヴェリヌス伝』"Vita s. Severinus"と初期の同修道院の戒律と推定されたタルナート(タランテーズ)戒律"Regula Tarnatensis"をとりあげている。<sup>14)</sup>

まず、『聖セヴェリヌス伝』について、同書はパリ分国王ヒルデベルト1世(Childebert, 在位511-558年)の命によって司祭ファウストウスが著し、10世紀の写本として伝えられて

おり、また、9世紀初頭、カール大帝の巡察士のサンス司教マグヌスの依頼により、前書を種本として名称不詳者が著した書の12世紀の写本が存在する。問題の所在は、熱病に苦しむクロードウィヒがパリに招いて病を癒させたセヴェリヌスがアガウヌのabbasと称されており、このセヴェリヌスがabbasという職にあったことが事実としても、同書からは、アガウヌの殉教者の墓所にabbasのセヴェリヌスを指導者とする修道的共同体の存在を確認できない。<sup>15)</sup> それはabbasという語が必ずしも修道院長を指すのではなく、中世初期では司教座付属のバシリカの聖職者の長を意味しており、<sup>16)</sup> このabbasの語は515年以前にアガウヌに修道院の存在を証する決め手とはならないからである。

つぎに、タルナートの修道院戒律について、この戒律を用いる修道院が515年以前のアガウヌに存在したという説は、J.ジムラーがタルナート修道院の場所を同定しないまま、それとアガウヌの修道院とを同一視し、<sup>17)</sup> H.ルクレルクとH.フォン・シューベルトなども同説を追認している。<sup>18)</sup> 確かに、515年以後のアガウヌの修道院で実施された典礼、後述する「詩篇の永続連続」"laus perennis"がタルナートの修道院戒律にも存在する。アガウヌでは、この典礼の実施のために、後述するように、修道士に労働義務の免除を定めているのに対して、タルナートでは、種々の労働義務を課していることから、また、同戒律に存在するタルナートの修道院戒律の第15条「神の御業」"opus Dei"という言葉はベネディクトからの借用語であり、<sup>19)</sup> それゆえにタルナートの修道院戒律の成立は6世紀中頃にもとめられ、同戒律がアガウヌに515年の時点以前にも、それ以後にも使用されたという説は否定される。さらに付言すれば、「そこからすべての女性が連れ出され、俗人の家族が除かれ、修道士たちの、神の家族がそこに住まわされた…」との『アガウヌの諸修道院長の伝記』"Vita Abbatum Acaunensium"が伝える、515年のアガウヌの修道院設立時の記事は、<sup>20)</sup> タルナートの修道院戒律の第20条の女性の修道院内立ち入り禁止規定との矛盾から、<sup>21)</sup> 515年以前のアガウヌにおける同戒律の使用ばかりでなく、修道院存在そのものも否定される。

このブッソン説に対して、マセとモイーゼが当地に修道院の存在の可能性を唱える新説をもって反論した。両者の見解によれば、アガウヌの殉教者のバシリカ近くに存在する、管理者の住まい"domus basilicae"があり、そこには『ジュラの諸教父の伝記』が献呈されたアガウヌの二人の修道士、ヨハネス(Johannes)とアルメンタリウス(Armentarius)がおり、同伝記がジュラ諸修道院の戒律であり、かつ解説書であったことから、かれらがこの地で同戒律のもとで修道生活を営んでいたこと<sup>22)</sup>、また、マセは当時、すでに著名になっていたガリアの巡礼の地、アガウヌに独立的な小グループの放浪修道士(Sarabaites)が定住していた可能性を指摘している。しかし、同説の正否の決定は、『ジュラの諸教父

の伝記』の執筆時にしぼられ、F.マルティーンは同伝記の最後の人物、コンダ修道院長エウゲンドウスの死を512年／514年と結論づけ、そして、515年後、まもなく死去したリヨンの貴族婦人シャグリア(Syagria)の生在が同伝記の執筆時期には確認されており、<sup>23)</sup> 同伝記が515年以前のアガウヌの修道院戒律となる可能性は薄いと言わなければならない。

[注]

- 1) Besson, op. cit., p.46-49; Theurillat, op. cit., p.11.
- 2) Theurillat, op. cit., p.12.
- 3) Besson, op. cit., p.122.
- 4) Vita SS. Patrum Iurensium Romani, Lupicini, Eugendi, 44,7, ed. F.Martine, Vie des Pères du Jura, Sources Chrétiennes N.142, Paris 1968, p.286f.
- 5) Besson, op. cit., p.60; トウリラによるブッソン説の追認, Theurillat, op. cit., p.18.
- 6) ブッソンはこの奉遷式を470年頃と推定, Besson, op. cit., p.57; 聖イノケンティウスの存在の信憑性については, ibid., p.55.
- 7) H.Büttner, Zur frühen Geschichte des Bistums Avenches-Lausanne, Frühmittelalterlichen Christentum und Fränkischerstaat, 1961 Darmstadt, S.162.
- 8) Besson, op. cit., p.14f; Theurillat, op. cit., p.14.
- 9) Besson, op. cit., p.12-15.
- 10) Theurillat, op. cit., p.14.
- 11) C.Jullian, Histoire de la Gaule, Bruxelles 1964, VIII, p.320; 拙稿「トゥールマルティヌスの修道院運動」, 『西洋史学』69, 1966年 27頁
- 12) Theurillat, op. cit., p.17.
- 13) L.Blondel, L'abbaye de St-Maurice d'Agaune et ses sanctuaires. Une ville sainte, Zeitsch. Archäol. 22, 1962 S.158-164.(Zuferrey, op. cit., p.29.)
- 14) Theurillat, op. cit., p.20.
- 15) ibid., p.25.
- 16) L.Üeding, Geschichte der Klostergründungen der frühen Merowingerzeit, Berlin 1935, Historische Studien 261, S.96f.
- 17) J.Simmler, Vallesiae descriptio, Leyde 1633, p.90 (Theurillat, op. cit.,27).
- 18) H.Leclercq, Agaune, Dictionaire d'arch. chrét. et de Liturgie, t.I, Paris 1907; H.von Schubert, Geschichte der christlichen Kirche im Frühmittelalter, Tübingen 1921, p.612.
- 19) Besson, op. cit., p.115.
- 20) Vita Abbatum Acaunensium 3, (Besson, op. cit., p.161f.).
- 21) Besson, op. cit., p.118.
- 22) Massai, op. cit., p.471; Moyse, op. cit., p.70f.
- 23) Martine, op. cit., p.56.

## [II] ガロ・ブルグンド時代の聖マウリス修道院

### 1. 聖マウリス修道院とブルグンド王権

アヴィトゥスの説教“Homilia”のなかの文言“innouatione monasterii”は、<sup>1)</sup> 前章で明らかにしたように、その実体は既存修道院の「改造」ではなく、それをトゥリラが“dédicace”（献堂）の意味に解釈し、またC.ヘーフェレは“consacrer”（聖別）と捉えているところから、<sup>2)</sup> “innouatione monasterii”の意味は「創設」と解釈しうる。

ここで、聖マウリス修道院設立が515年とする定説について触れておくことにしよう。

アヴィトゥスが説教のなかで、ジギスムンドを「支配にあっては、誰よりも若く、祭壇（信仰）にあっては、すべての者よりも優れている」“in tribunali aliquibus iunior, in altario omnium prior”の言葉から、かれがいまだ父王グンドバットのもとで副王の地位にとどまっていた時期を示し、1年後の別のかれの説教では、「支配にあっては、すべての者を差し置いて唯ひとりの者であり、信仰においてはすべての者から抜きん出た者である」“in tribunali unus prae omnibus, in altari unus ex omnibus”と述べているところから、かれをブルグンドの王と表現しており、かれの登極が516年の父王グンドバットの死去以後のことから、設立年が515年であることは明白である。このアヴィトゥスの証言を裏付ける傍証として、初代院長ヒネモドウス(Hynemodus)の墓碑銘から、同院長の死が516年1月3日である事実と、<sup>3)</sup> アヴェンシュ(Avenches)のマリウス(Marius)の『年代記』が同修道院の設立年をフロレンティウス(Florentius)とアンティミウス(Anthemius)のコンスル在位期(515年)とする証言が存在する。<sup>4)</sup> しかし、他方ではトゥールのグレゴリウスが同設立時を父王の死(516年)以後と述べているところから、<sup>5)</sup> この二つの同時代史料のマリウスとグレゴリオスの証言のいずれに信憑性を認めるかの問題が生ずる。地理的にみても、アキタニア北部のトゥールのグレゴリウスよりは、マリウスがアヴェンシュの司教として近隣のヴァリス地方の事情に通じていたとみるべきであり、したがって、515年以前にアガウヌに存在したのは、『聖セヴェリヌス伝』が伝える“abbas”を長に頂く聖職者たちが管理する殉教者たちの墳墓教会（バシリカ）と、巡礼者と旅人の世話をする俗人家族が存在する付属の救護所“diversorium”であって、<sup>6)</sup> それは修道院ではなかったと言えよう。

### 2. 聖マウリス修道院と国王寄進

同修道制の核となった典礼「詩篇の永続連祷」“laus perennis”のコンスタンティノーブルからの導入の動機について、『聖ジギスムンドの受難』とトゥールのグレゴリオスの『殉教者たちの栄光について』“De gloria Martyrium”とは、ジギスムンドが後妻の中傷

にもとずく息子シギリクスの殺害に対する贖罪行為の結果としたが、<sup>7)</sup> その導入は、すでに修道院設立と同時に起こわれたことは確かであり、<sup>8)</sup> それはコンスタンティノープルの総主教との交流関係をもつアヴィトゥスによる仲介の可能性が想定される。<sup>9)</sup>

この詩篇を日夜途切れることなく唱える勤行は、これを交代で勤める修道士の複数グループ"turma"がおこなった。修道士たちはこの勤行のために、生活維持の労働義務が免除されたこと、また、アガウヌが狭隘な高地であり、頻繁に起こったローヌ河の氾濫と土砂崩れとによって、修道士たちの開墾と耕作とによる自給体制の維持が不可能な土地であったことが、同修道院の維持に国王寄進を必要としたのであろう。

この"turma"の設置と修道院の寄進所領とを伝える史料は、アガウヌ教会会議(515-523年)の議事録とジグスムンドの同修道院寄進文書とをふくむ同修道院設立文書(*Copia Foundationis monasterii Sancti Maurici Agaunensis*)であった。教会会議録が上述の年の間の5月1日(*pridie kalendas Maii*)にアガウヌで記録され、設立文書は同月15日(*sub die idus Maii*)にヴェロリエで発行され、この二通の文書が8世紀後半から9世紀にかけて、ひとつの文書にまとめて編纂されたものである。この設立文書の写本は12世紀と14世紀の校訂本と、両写本をもとに編纂したものの三種類が伝えられており、いずれもアガウヌ関係の諸史料の記事の挿入、修正および改ざんをうけている。<sup>10)</sup>

同修道院設立文書の信憑性について、レイモンは、上記の問題点を認めつつも、そこに6世紀初頭の真正な文書の存在を読み取っている。しかし、トゥリラは、現存する三つの写本のうち二通は、ルードウィヒ敬虔王(在位814-840)による文書書式改革以前に、いま一通は8世紀後期に作成され、その作者が修道院設立を伝える同時代の文書の装いを施した文書と主張した。<sup>11)</sup> また、マセの見解は、この設立文書が偽文書とする根拠を教会会議録の形態にもとめ、この作者は同修道院の文書室に存在するメロヴィング期・カロリング期の修道院関係文書のモデルに倣って、寄進文書の部分を作成し、教会会議録に関しては、当時、広く用いられたレランス修道院創設期の戒律、『4人の聖なる教父たちの戒律』"Regula sanctorum patrum Serapionis, Macharii, Pafnutii et alterius Macharii"の模倣であり、同戒律では、4人の教父の発言が共住的修道生活を組織するための規約となっており、同設立文書では、この役割を4人のブルグンドの諸司教が演じているとしている。そして、マセが同文書を偽文書とする根拠は、そのひとりリヨン司教ヴィヴェンティオルス(Viventiolus)の発言には、同設立文書の作成と同時期のカロリング期の修道院改革の規範となったベネディクト戒律から7カ所の表現の借用と、同戒律(第21章)の10人の修道士グループの"decania"をアガウヌの"turma"に読み替えている点であった。<sup>12)</sup> しかし、マセが主張するように、ベネディクト戒律から表現様式の借用の跡があるとしても、リヨ



ン司教の発言のなかに、例えば、アガウヌとベネディクト両修道制間に存在する労働義務に関する相反する関係が読みとれるのであり、同文書には両修道制の理念的混淆の状態は認められず、本質的な部分には、信憑性が存在すると言えよう。

以上の設立文書の問題点を考慮しながら、所領寄進の部分を検討することにしよう。

この寄進の部分について、J.M.パルドスウスは、940年に大火によって焼失した文書の復元と、翌年ブラコン(Bracon)とサリンヌ(Salines)の城砦がコメスのアルベリクス(Albericus)に譲渡されたとき、その所有権の確認のために作成され、その際、かなりの数の所領が挿入されたとしている。<sup>13)</sup> M.ツフェライは、同寄進文書が10世紀以前の聖マウリス修道院の修道院組織と所領について伝える重要な史料であることを認めている。<sup>14)</sup> 本稿では、パルドスウス版の校訂本のテキストを用いて、<sup>15)</sup> ジギスムンドの寄進に帰属する所領の所在を探ることにしよう。

寄進文書が示す聖マウリス修道院が寄進をうけた所領は、リヨン、ヴィエンヌ、グルノーブル、アオスタ、ジュネーブ、ジュラ地方のヴァデンシス(Valdensis)、アヴァンシュ、ローザンヌおよびブザンソンなどの諸司教区および諸ガウ(Gau)に存在するが、さらに特定された場所を列挙すれば、ヴァリス地方およびアオスタでは、ポン＝ド＝ボウヴワン(Pont-de-Beauvoisin, Rey)、ジッテンよりローヌ河上流のシェール(シデル)(Sierre又はSiders;Sidrio)、その上流のベルヌ(Berune;Bernona)、ルエシュ(Louèche/Leuk;Leuca)、ジッテンの対岸のブラモワ(Bramois;Bromsio)、グルノーブル近隣のオルロナ(Or(l)ona又はOlgana)、カシェール(Cassières;Cacusa)、グルノーブル近隣のヴウレイ(Veurey; Rubregio又はVobregio)、ローヌ・イゼール両河間のレシェーユ(L'Echelles; Staties又はScalis)、ジュネーブ北東の湖岸のコムニユ(Commugny; Communiaco)、ジュネーブ湖南岸のマラン(Marin; Marinico)、ローザンヌの北東のジュネーブ湖北岸のモナツ(Monnaz; Muratto)、場所が同定できなかったブリオン(Brion; Briogia)、そして"duodecimo paterno"の語については、レイモンは何を指し示しているのか不明としながらも、ボルドーからエルサレムに向かう巡礼路のスサとトリノ間のドワール河(Doire)沿いの地域の可能性を指摘し、他方では、ツフェライはZ校訂本が記す"duodecimo paterno"の後のピリオッドをとって、つぎの文章の"In civitate Augusta turrem unam quae respicit ad occidentem, et Levira(Elevaz), Lagona(Liconne), Gizorolis(Chezerola), et Morga(Morgex)"をそのまま続けて、都市アオスタの西の塔とアオスタ溪谷の上記の諸ヴィラとを並列に解釈している。<sup>16)</sup> そして、最後に、以上の諸所領に下僕、解放奴隷、小作人、動産、不動産および租税などを含め、それにインムニテートが添えられている。<sup>17)</sup>

ツフェライはこの修道院所領の分布が三つの地域、グルノーブル、アオスタ溪谷および

中部ヴァリスに集中していることに注目し、これらの所領が同修道院から離れて、しかも互いに固まっている状況から、それは拡散傾向をおびる信徒個人レベルの寄進ではなく、この地域がブルグンド王国の中核地域であったことから、その王領地からの寄進であることが裏づけられるとしている。<sup>18)</sup>

### 3. 聖マウリス修道院と教権

#### 1) 同修道院とブルグンドの諸司教

同修道院設立文書に収録のもうひとつの文書、アガウヌ教会会議の決議事項というよりは、議事録とも言うべき文書は、信憑性が高い『アガウヌの諸修道院長の伝記』"Vita abbatum Agaunensium"<sup>19)</sup>とは一致しない部分や錯誤があり、寄進文書と比べて、その信憑性は低いと言えよう。ここでは諸史料と同教会会議の議事録が伝える諸事実とを比定しながら、それらが同修道院と教権との関係を証する史料となりうるかどうかを検討することにしよう。

まず、同議事録の信憑性に関する疑念は、同教会会議の司教出席者の問題であり、議事録が伝える司教の60人と同数のコメスの出席者数について、ヘーフェレは当時のブルグンド王国内の司教数は27人であり、60人とするローマ数字、lxはIXの写筆上の誤りと解釈するル・コワント(Le Cointe)説を紹介しながらも、国王がブルグンド国家の近隣司教をも召集したとするセイエ(Ceiller)説に賛同している。<sup>20)</sup>しかし、レイモンは517年のエパオンヌ教会会議が24人の司教とひとりの代理者、また501年、グンドバットがブルグンド法発布の際、召集したコメスの数が31人であり、この数がブルグンド王国で召集しうる司教とコメスの聖俗高位者の総数であると推定し、"totque"と言う語を"et"に置き換えて司教とコメス合計で60人と解釈し、同修道院設立が国家的事業であったとすれば、同会議に聖俗の高位者を合わせて60人を召集することは可能であり、このことで同文書を偽書とする根拠にはならないとした。<sup>21)</sup>

つぎに、同文書の署名者の数と顔ぶれに関しては、署名者がわずか3人の司教であったことをいかに解釈すべきであろうか。レイモンは国王文書の発送は同会議の後のことであり、会議後も宮廷に残った国王側近者に国王尚書局が署名を依頼をしたのではないかとしている。<sup>22)</sup>3人の司教の署名者はジュネーブ司教マクスィムス、グルノーブル司教ヴィクトールおよびリヨン司教ヴィヴェンティオルスであった。しかし、署名者にジグスムンドの霊的指導者、ヴィエンヌ首都司教アヴィトウスの名がみられないことが同文書に疑念を呼ぶ根拠となっている。ただし、ヘーフェレがアガウヌ教会会議の開催年を515年から523年の間に置き、パルドスウスが設立文書の発行を523年においているが、しかし、前述したよう

に、同会議録の作成が515年5月1日(*pridie kalennndas Maii*)、また寄進文書の作成が同月15日(*sub die idus Maii*)であるとするレイモンドの見解が正しいならば、518年歿のアヴィトゥスが同教会会議の署名者となりうる可能性がある。

アヴィトゥスが同修道院設立に果たした役割は、(イ)首都司教としてアガウヌ教会会議の召集と指導、(ロ)同修道院の聖別式での説教、(ハ)同修道院の性格を決定づけた「詩篇の永続連禱」の導入、以上三つの事項から、かれが署名筆頭者となるのは当然であろう。ブルグンド聖俗両界における、アヴィトゥスの影響力はおおきく、かれはオーヴェルニュのアヴィトゥス・アポリナリス両家門と血縁関係をもつセナトール貴族に属し、父のあとを継いでヴィエンヌ司教となった。かれはブルグンド宮廷に影響力をもち、グンドバットはかれと親交をもちながらも、アリウス派に留まったが、ジギスムンドの改宗に成功している。ジギスムンドはコンスタンティノーブルの総主教と友誼を結ぶかれを介して、皇帝アナスタシウスに近づき、家臣としての礼をとっており、<sup>23)</sup> 当地から「詩篇の永続連禱」の導入も同王の意向に沿うものであった。さらに、アヴィトゥスは517年のエパオヌと518-523年のリヨンの両教会会議を開き、ブルグンド王国のカトリックへの改宗を決定づける。<sup>24)</sup> また、ここでアヴィトゥスと前記の3人の署名者との関係を示せば、マクシムスはアヴィトゥスと書簡交換の相手であり、対ブルグンド王権に対する姿勢では一致しており、ジギスムンドにアガウヌの殉教者たちに対する崇敬の念を起こさせ、アガウヌのバシリカから女たちを含む俗人家族を退去させ、修道院設立の準備をはかった人物であり、<sup>25)</sup> グルノーブル司教ヴィクトールはアヴィトゥスが召集したエパオヌとリヨンの上記両教会会議に出席し、かれと書簡交換でもって結ばれており、<sup>26)</sup> 最後にリヨン司教ヴィヴェンティオルスについても、かれはアヴィトゥスによって512/4年ジュラ諸修道院長に推挙されたが、修道院に留まるよりも司教職につくことを望み、アヴィトゥスの支持でもってリヨン司教となっている。<sup>27)</sup> いずれもヴィエンヌ首都司教の従属司教であるところから、アヴィトゥスの直接影響下の人物たちと考えられ、レイモンドの前述の主張に沿って解釈すれば、アヴィトゥスは会議終了後、アガウヌを離れ、署名をかれの従属司教らに委ねたとも考えられる。

同文書の信憑性を疑わせるもう最後の点は、アガウヌ教会会議にジッテン(シオン)司教としてのテオドルス(Theodorus)の出席であった。同会議におけるかれの役割は、出席者たちから、マウリス、エクズペリウス、カンディトゥスおよびヴィクトールらの遺骨を埋葬するための個々の教会を設立し(*singlis fabricare ecclesia*)、ほかの仲間の遺骨を一か所に合葬する決定を引き出したことであった。このテオドルスがアガウヌの殉教者の聖遺物の発見者で、4世紀末期の前出マルティニ(オクトドルス)司教と同一人物とするならば、トゥリラが指摘するように、それは明らかに錯誤であり、おそらくエウケリウスの

『アガウヌの殉教者たちの受難』からの直接的な借用とされる。<sup>28)</sup>

同文書の記事がテオドルスをマルティニ司教ではなく、ジッテン司教とした根拠について、トウリラは、同文書が編纂された8世紀末期から9世紀初頭、ジッテンおよびアオスタ諸司教座が首都司教座ヴィエンヌから独立し、タランテーズを首都司教座とする新管区の創設に関わる紛争の反映とみなし、アガウヌの殉教者の聖遺物の発見と同修道院設立の栄誉の一端をタランテーズの管区内のジッテン司教座に担わせたと解釈している。かりにトウリラ説が正しいならば、同文書におけるアヴィトウスの署名の欠落を含めて、かれの事績についての言及の無さはこの紛争の反映と言えないであろうか。

しかし、最後に、設立文書の信憑性を疑うマセが指摘する事実、すなわち、ジギスムンドの同修道院戒律についての問いに答える役割を、リヨン司教ヴィヴェンティオルスに付したことは謎であり、それは、かれがジュラ諸修道院の出身者で、同会議に出席した、4人の有力ブルグンド聖職者のうち唯一の修道生活の経験者であったと言うことは、近代の歴史家が研究を通じて初めて知りえる事実であり、それをカロリング期の執筆者が知っていたことは、この地域にかなりの確かな情報が伝承されていたことを暗示している。<sup>29)</sup>

## 2) 聖マウリス修道院と教皇権

設立文書のなかで同修道院維持に関するジギスムンドの質問に答えて、リヨン司教ヴィヴェンティオルスは、(1)修道院の財政的支援”munificentia”は国王に依存し、(2)霊的な問題の勧告と教義”exhortatio et doctorina”については教皇にもとめ、(3)修道院の規律問題では、修道院長に従うという三つの原則でもって答えている。<sup>30)</sup>

この3つの原則のうち、第2の教皇に直属するという主張は、6世紀初頭の教会法とは一致せず、また、修道院と司教権力との関係についても、修道院に対する自由裁量権を司教に認める451年のカルケドン教会会議の規定条項(C.4;C.8;C.16;C.24)に反しているとトウリラは言う。<sup>31)</sup> このカルケドンの規定は5世紀後半から7世紀前半まで、アイルランド修道制導入以前の西方における修道院と司教権との法的関係を規定する規範となっており、トウリラは同規定からの逸脱と霊的問題に関する教皇権への依存は、設立文書の編纂時期、8世紀末期から9世紀初頭の同修道院と教皇権との関係の実態、または両者の関係について、同文書の編纂者の「そうあるべきとする願望」の反映ではなかったかと主張した。

同修道院をめぐる権力関係については、同修道院の戒律が伝えられていないことから、別の視角から検討する必要がある。聖マウリス修道制は455年のアルル教会会議の決議事項、いわゆるレランス修道院の戒律を始原とするローヌ（プロヴァンス）修道制に属しており、同系統に属するものに、549年のオルレ안의貧教院(Xenodocium)<sup>32)</sup>とシャロン＝

シュル＝ソーヌの聖マルセル修道院が存在する。前者はフランクのパリ分国王ヒルデベルト1世によって、後者はブルグンド分国王グントラムによって、特許状(privilegium)の授与をもって設立されている。『フレデガールの年代記』は、オルレアンの大司教と聖マルセル修道院の設立がアガウヌ修道院の制度によることを示している。<sup>33)</sup> 同特許状は伝えられていないが、その内容はポワティエ女子修道院設立者クロタール1世の王妃ラデグンデ(Radegunde)がフランク諸司教に宛てた同修道院に特許状授与を要請する書簡から知ることができる。<sup>34)</sup> すなわち、司教に対して修道院側が求めた権限とは、(イ)修道院長の自由選出権、(ロ)修道院への立ち入りと接待の拒否、(ハ)修道院とその財産に対する支配権(dominatio)の拒否、(ニ)修道院戒律の保全、以上4項目であった。

ところで、設立文書と同時代の6世紀前半までの修道院に対する司教権についての教皇側からの規定については、すでに、前稿で明らかにしたように、<sup>35)</sup> 教皇側が修道院に関して司教権に認めた事項とは、修道院所領の保護、修道生活の安寧の保証および監督がおもなものであって、T.P.マクローランはこれに裁判権を加えている。<sup>36)</sup>

以上のことから、ラデグンデ書簡と6世紀前半までの上述の教皇側の特許状から読み取れる修道院と司教権との法的関係が聖マウリス修道院に妥当するとすれば、同修道院の霊的問題を教皇権に託したとする設立文書の記事はどのように解釈できるのであろうか。教皇権に関わる設立文書の箇所は、ヴィヴェンティオルスが諸司教たちと提案し、ジギスムンドがこれに承認をあたえた、司教側からの特許状"privilegium"であり、それは教皇からではないことは明らかであり、霊的問題の教皇権への委譲という、極めて曖昧な表現が修道院に対する司教の司牧権力の放棄を、かならずしも意味するものではない。聖マウリス修道院に対する当該管轄区のマルティニ司教が修道院内の聖職者叙階権をふくむ司牧権、監督権および保護権を所有していることは明らかである。この間の教皇権の立場は明確にしない。

#### 4. 聖マウリス修道院の性格

1) 同修道院がジギスムンドの発議と寄進による設立であったとすれば、それはブルグンド国王が所有する王立修道院と呼ぶべき性格のものと言えるのであろうか。L.ユーディングの国王私有修道院(Königliches Eigenkloster)の定義によれば、それは国王が自由に修道院を自らの所有物として譲渡しうるものであり、かれが検討の対象とした6世紀のフランク国家では、国王の設立修道院がその息子または政治的後継者に譲渡され、あるいは遺産相続の対象となっている事例は存在しないと言う。ただ、設立者の修道院に対する寵愛が子孫に引き継がれ、その後継者たちがそこを最後の安息の地とする事例が存在するが、

それは単に個人的な好みか、保護の関係であって、所有者と所有物との法的関係によるものではない。したがって、修道院を設立する際の国王の援助・保護は国王の修道院所有関係を示唆するものではなかった。<sup>37)</sup>

ところで、設立文書は、ジギスムンドによる聖マウリス修道院設立がブルグンド国家の聖俗勢力を結集した国家的事業であった印象をあたえている。設立後のジギスムンドと同修道院との関わりは、523年フランクのオルレアン分国王クロドマル(Chlodomar, 在位511-524年)のブルグンド侵攻の際、ジギスムンドは同修道院に逃れたが、オルレアンに連行されて家族ともに処刑されたのち、遺骨が535/536年に聖マウリス修道院に移され、同修道院付属のバジリカのひとつ、聖ヨハネ教会に埋葬され、熱病を癒す聖人崇敬の対象となった。執筆者不詳の『聖ジギスムンドの受難』"Passio sancti Sigismundi"は同修道院とジギスムンドの名との結びつきを決定づけ、かれが聖人崇敬の対象となり、それはブルグンド部族意識の宗教的表現ともなっている。<sup>38)</sup>

『聖ジギスムンドの受難』の執筆年代は7世紀から8世紀の間、または、801年以後と諸説によって異なる。<sup>39)</sup> ブッソンは「絶対対格」の文法上の古い用法から執筆年代をさらに逆上らせながらも、それにはトゥールのグレゴリウス、アヴァンシュのマリウスおよびフレデガールからの借用と年代の誤りがみられ、<sup>40)</sup> 史料としての信憑性は乏しい。

このようなジギスムンドと聖マウリス修道院との重層的結びつきが認められるとしても、ユーディングの国王私有修道院の定義にしたがえば、同修道院はブルグンド国王所有の修道院、すなわち王立修道院とは言えないであろう。

2) 修道院戒律の問題にここで触れて置くことにしよう。『アガウヌの諸修道院長の伝記』が伝える創設期の3人の修道院長、ヒムネモドウス、アンブロジウスおよびアキヴィスのうち、ヒムネモドウスとアキヴィスはヴィエンヌ司教座管轄区内のローヌ河岸のグリニー修道院(Gringy)の出身者であり、前者は院長職にあった。また、アンブロジウスはリヨンのバルブ修道院長(バルバラ; île-Barbe)であった。ヒムネモドウスが聖マウリス修道院の初代院長となったのは、前出ジュネーブ司教マキシムスの要請によるものであり、かれが提示した院長職受理の条件はアンブロジウスをバルブ修道院からの引き抜きであった。ヒムネモドウスはグリニー修道院から幾人かの修道士と司祭プロブス(Probus)を伴い、アンブロジウスはリヨンの2人のabbas、アルカディウス(Arcadius)とドラビスティオ(Drabistio)、あるグラーフ職の人物とともにアガウヌの修道院の創設に参加した。グルノーブル出身のアキヴィスは軍職を経てグリニーの修道士となった人物であった。<sup>41)</sup>

聖マウリス修道院の聖別式が515年9月22日であり、初代院長ヒムネモドウスの死去が

かれの墓碑文により、翌年の1月3日であるならば、同修道院の基礎固めは後を継いだアンブロジウスであったと言える。同修道院の基本的な指針は、創設期の修道院構成者がグリニーとバルブ両修道院関係者によって占められたことから、両修道院が属するローヌ（プロヴァンス）修道制に基づいたことは明らかである。

しかし、聖マウリス修道院が東方から導入した、前出の典礼「詩篇の永続連祷」は、そこに特異な修道制をつくりだした。同典礼の導入は修道士に労働を免除し、修道士たちを幾つかのグループ“turma(norma)”にわけて、この勤めを輪番制でもって行わせたことは、すでに述べた。注目すべきは、このグループの名が、設立文書の前出の[Z]版では、“id est Granensis, Insolana, Jurensis et Meluensis seu domni Probi”とあり、また同じく[S]版では、“id est Granensis, Islana, Jurensis et Meluensis et cetere”であって、パルドウスウスの校訂版では、“Meluensis”を削除して、これに代わって“Lirinenis”を入れている。これらはグリニー、バルブ、ジュラ（コンダ）の諸修道院と“Meluensis = Valdensis”、すなわちロマンモティエール（Romainmôtier）修道院を指し、“(turma)domni Probi”は修道院名ではなく、個人名であり、レイモンはそれを『アガウヌの諸修道院長の伝記』のなかに登場する、ヒムネモドウスがグリニー修道院から連れてきた司祭プロブスと同定し、トゥリラは、かれが515年以前、殉教者のバシリカの奉仕者であって、修道院設立後に修道士となり、この“turma”を構成したと主張している。そして、この“turma”の数は、[Z]版では5グループ、[T]と[S]の版が9グループであり、それぞれの写本の版が作成された時代の同修道院の“turma”の数が反映したものと考えられる。この“turma”が勤める「詩篇の永続連祷」は、聖務日課の夜課、朝課、一時課、三時課、六時課、九時課そして晩課にあって、日夜途切れることなく唱えられた。<sup>42)</sup>

このような聖マウリス修道院の形態に関して、レイモンは、“turma”が“norma”とも表されるように、これは“règle manastique”を意味したのであり、したがって、同修道院設立の際、ジグスムンドから要請をうけた前述のブルグンド諸司教は修道院全体を律する戒律の下に、同修道院には“turma”の数だけの異なった戒律が存在したと解し、それぞれのグループの修道士が出身修道院の戒律に従って生活したという仮説を唱えた。<sup>43)</sup>

しかし、レイモンの仮説が正しいとすれば、戒律が修道院全体を律する戒律と“turma”のそれとの併存という形態となり、この複雑な戒律のありかたからは、聖マウリス修道院像の具体像を描くことはできない。おそらく、各“turma”に付けられた修道院名は、“turma”が用いた当該修道院戒律を指すのではなく、創設期の“turma”の修道士の出身修道院名がただ単に残されたにすぎず、修道院組織を維持する戒律はローヌ（プロヴァンス）修道制に属し、しかも、一元的なものであったと考えられる。

[注]

- 1) Avitus, Homilia (Besson, op. cit., p.123-125)
- 2) C.J.Hefe, Histoire des conciles, Hildesheim/New York 1973, II,2, p.1012.
- 3) Theurillat, op. cit., p.42.
- 4) Marius episcopus Aventicensis, Chronica, MGH AA XI, 1894, p.234. Florentio et Anthimio (anno 515) monasterium Acauno a Sigismondo constructum est: Petro. Hoc consule (anno 516) rex Gundobagaudus obiit, et levatus est filius eius Sigismundus rex.
- 5) Gregorii Turonensis Historiarum libri decem (Historia Francorum), (以後HFと略称) Hrg. R. Buchner, Ausgewählte Quellen zur Deutschen Geschichte des Mittelalters Bd.II. Darmstadt 1967, III,5, p.148.
- 6) Vita Abbatum Acaunensium 3, (Besson, op. cit., p.161f.); Zufferey, op.,cit. p.29.
- 7) Psallentium ibi assiduum instituens, Gregorii Tur., HF.,III,5, p.148; \_\_\_\_, De gloria martyrum, 75, MGH SSRM, I(2), p.88.
- 8) qui die noctuque caelestia imitantes, cantionibus divinis insisterent. Vita Abbatum Acaunensium 3, (Besson, op. cit., p.161f.).
- 9) Theurillat, op. cit., p.103; F.Prinz, Frühes Mönchtum im Frankenreich, München-Wien 1965, S.103.
- 10) Hefe, op. cit.,II,2, p.1017-1022; J-M.Pardessus, Diplomata Chartae, Epistolae, Leges aliaque instrumenta ad res Gallo-Francicas spectantia, Paris 1843, I,(Prolegomena, pars secunda, sect.II, cap.I) p.23; M.Reymond, La charte de saint Sigismond pour Saint-Maurice d'Agaune 515, Revue d'histoire suisse, VI, 1926, p.41; Zufferey, op. cit., p.40-46.
- 11) Theurillat, op. cit., p.62-75.
- 12) Massai, op. cit., p.63; 「ヌルシアのベネディクトの戒律」『中世思想原典集成 5・後期ラテン教父』編訳・監修 上智大学中世思想研究所・野町 啓 平凡社 1993, 戒律第21章, 276頁。
- 13) Pardessus, op. cit.,I, p.23.
- 14) Zufferey, op. cit., p.39.
- 15) Pardessus, op. cit.,I,(Diplomata, chartae, epistolae, leges) p.66-70.
- 16) Zufferey, op. cit., p.43.
- 17) Reymond, op. cit., p.24-29.
- 18) Zufferey, op. cit., p.43.
- 19) Theurillat, op. cit., p.42.
- 20) Hefe, op. cit.,II,2, p.1021.
- 21) Reymond, op. cit., p.44.
- 22) アガウヌの教会会議の開催年について、ヘーフェレは515年から523年までの間、パルドウスウスは523年としている。



- 23) Prinz, op. cit., p.103.
- 24) K.F.Stroheker, Der Senatorische Adel im Spätantiken Gallien, Tübingen 1948, Prosop.Nr.60,S.154f.
- 25) Vita Abbatum Acaunensium 3,(Besson, op. cit., p.176.)
- 26) L.Duchesne, Fast episcopaux de l'ancienne Gaule, Paris 1894, I, p.226.
- 27) 拙稿「ガロ・ブルグンド期のジュラ諸修道制—ジュラ諸修道院（コンダ・ラウコンヌおよびラ・バルム）をめぐる諸問題—」愛知県立芸術大学紀要No.25, 1995年, 17頁。
- 28) Theurillat, op. cit., p.70.
- 29) Massai, op. cit., p.52-55.
- 30) Optime nobis videtur, ut munificentiam ad regem habeant, exhortationem et doctorinam habeant ad sedem apostolicam; jam quia scimus comprobata habere disciplinam et sanctam conversationem sanctum Hymnmodum quem praeesse constituimus monasterio huic, (Pardessus, op. cit.,I, p.69)
- 31) Theurillat, op. cit., p.65, n.32.
- 32) J.Gaudemet et B.Basdevant, Les canons conciles mérovingiens (VI<sup>e</sup>-VII<sup>e</sup> siècles), Paris 1989, I, p.310, Concilium Avrelianense ann.549.Oct.28. C.15.
- 33) Fredegarius, Chronica, IV,1, MGH SSRM, II, p.124.
- 34) Gregorius Tur., HF.,IX, p.392-400. ;E.Ewig, Beobachtungen zu den Klosterprivilegien des 7. und frühen 8.Jahrhunderts, "Adel und Kirche", Festschrift G.Tellenbach, Freiburg/Basel/Wien 1968, S.56
- 35) 拙稿「中世初期における修道院と司教権力との法的関係に関する一考察—修道院Libertasをめぐる—」愛知県立芸術大学紀要 6 1976, 46頁。
- 36) P.McLaughlin, Le très ancien droit monastique de l'occident, Ligugé-Paris 1935, p.176.
- 37) Ueding, op. cit., p.165.
- 38) Passio sancti Sigismundi, (Besson, op. cit., p.134-138)
- 39) Theurillat, op. cit., p.83.
- 40) Besson, op. cit., p.129.
- 41) Vita Vita Abbatum Acaunensium 4;7. これに二人のabbas, UrsolusとJustusが加わる (ibid.,5)
- 42) Pardessus, op. cit., I, p.68.
- 43) Reymond, op. cit., p.47.

### [III] メロヴィング・フランク時代の聖マウリス修道院

#### 1 聖マウリス修道院とフランク王権

##### 1) ヴァリス地方におけるフランク支配

523年ジギスムンドの死後、かれの兄弟、ゴドマール(Godomar, 在位524-532年)と同修道院との関係は不明である。『聖ジギスムンドの受難』が伝える諸事件についてのクロノロジーおよび史実関係に問題があり、ジギスムンド謀殺3年後の526年同修道院の第5代院長ヴェネランドウス(Venerandus)が同王の遺骨をオルレアンからアガウヌに移送せよとの神の啓示をうけ、ブルグンド人の有力者アンセムンドス(Ansemundus)がフランクのランス分国王テウデベルト(Theudebert, 在位534-548年)からその移送の許可をえたという。奉遷式は526年10月16日にアガウヌの埋葬の地、聖マウリス修道院付属の聖ヨハネ教会で挙行されたとする。ブッソンは、この事件が526年であれば、同修道院長は第3代のアキヴィスカトランキルス(Tranquillus)にあたり、この時期のランス分国王はテウデベルトの父テウデリヒ(Theuderich, 在位511-534)と同定した。したがって、ブッソンはヴェネランドウスが啓示をうけた年を、ジギスムンド死後3年ではなく、13年の誤りではないかとして、人物とクロノロジーとを一致させ、奉遷式を535/36年の10月16日と見なし、アガウヌにおける「聖ジギスムンド崇敬」の起源をフランク時代に求めている。<sup>1)</sup>

ジギスムンドの遺骨の奉遷式が535/536年とするならば、それはフランク諸王によるブルグンド王国の征服の時期であり、本稿が考察の対象するローヌ河流域がランス分国の支配下に入ったのかどうか、535年テウデベルトがクレルモンに招集した教会会議にアヴェンシュ(Avenches)司教グラマティクス(Grammaticus)が出席した事実は、H.ビュトナーが指摘するように、ジュラとアルプス間がランス分国支配下に入ったことは確かであるとしても、クレルモン教会会議にはそれ以外の司教の出席者はなく、マルティニおよびジュネーブを含む同湖の南部および東部地域がいずれの分国に属したのかは不明である。

ここで、ヴァリスがフランク王権にとって、どのような政治的意味をもったのか、という問題を考察しておこう。

565年と585年との間、司教座マルティニは、司教ヘリオドルス(Heliodorus)の時にローヌ河のさらなる上流の都市ジッテン(シオン)に移動した。この司教座の移転理由について、L.ドゥシェーヌおよびユーディングは、565年のマルティニ司教アグリコラ(Agricola)とアガウヌの修道士との間の原因不明の争いに求め、<sup>2)</sup> ビュトナーはそれをヴァリスをめぐるフランクとランゴバルトとの抗争にその原因を求めている。<sup>3)</sup>

この司教座移動については、マルティニがジュネーブ湖東端から大サン＝ベルナル峠を抜けてアオスタに抜けるアルペン・パスの麓にあり、その移動先のジッテンは、マルティニからローヌ河をさらに遡った難攻不落の岩山上にあって、この移動はフランクがランゴバルト侵入を防備する配慮であったとビュトナーは言う。<sup>4)</sup> 568年ドナウ河流域から北イタリアに始めて侵入したランゴバルトが、翌年ミラノ、572年パヴィアを占領し、その後、

モン＝スニを越えてローヌ河流域に侵入し、ブルグンド分国王グントラムと対決した。<sup>5)</sup> この間、ヴァリスに侵入した同族は聖マウリス修道院を占領している。

574年グントラムは、ランゴバルトのヴァリス地方への進出に対抗して、両大公ヴィオリクス(Wiolicus)とテウデフリド(Theudefrid, dux Ultraioranus)を派遣して、聖マウリス修道院の近隣、ベックス(Bex)でこれを破り、また、ローヌ河下流と西部アルプスのランゴバルトに対しては、patriciusのムンモルス(Mummolus)でもって征して、スサとアオスタ両谷の制圧により、大・小のサン＝ベルナル、モン＝スニおよびモン＝ジュネーヴルの諸峠が北イタリアのランゴバルトの侵攻の攻撃からの堡壘の役割を果たした。<sup>6)</sup>

#### b) ブルグンド分国王グントラムと聖マウリス修道院

580年頃グントラムはランゴバルトによる略奪と破壊から受けた同修道院の再建とそこからモン＝ジュウまでつながる所領の寄進をおこなった。トゥリラはグントラムによる同修道院の再建の意図について、それはディジョンの聖ベニーニュ修道院(St-Bénigne)を始めとするローマ街道沿いの主要諸修道院に対する保護政策がイタリアへのルートの確保と解釈している。

このグントラムの聖マウリス修道院の再建が対ランゴバルト政策の一環であるとしても、かれ自らの分国支配、さらには587年以後の統一支配への志向のなかで、一貫してフランク教会の保護と規律の擁護者として、6回の教会会議を招集し、また、かれの宗教的信条からアリウス派の西ゴートとランゴバルトに対する敵対政策など、かれの正統信仰擁護者の姿勢にペラギウスとグレゴリウス両教皇も期待を寄せており、グントラムの修道院保護政策もこの姿勢から理解しうることがあろう。<sup>7)</sup>

グントラムと聖マウリス修道院との結びつきは、同王が585年にシャロン＝スル＝ソーンヌの聖マルセル修道院(St-Marcell)を同修道院をモデルにして設立し、<sup>8)</sup> また、ディジョンの聖ベニーニュ修道院に「詩篇の永続連祷」の導入と、同修道院の院長職を聖マウリス修道院長が兼務しており、<sup>9)</sup> さらに、6世紀末期の碑文とトゥールのグレゴリウスの証言から、シャロン＝スル＝ソーンヌにアガウヌ殉教者の聖遺物を取り寄せており、<sup>10)</sup> プリンツはそこに同時に「詩篇の永続連祷」の典礼も導入されたと推定している。<sup>11)</sup>

593年グントラムの死後、ブルグンド分国の支配権は、アウストラシア分国王のヒルデベルト2世(Childebert II, 在位561-595年)とかれの母后で後見人のブルニヒルデ(Brunichilde)を経て、613年国家統一を果たしたクロタル2世(Choltar II, 在位584-629年)の手に移った。<sup>12)</sup> ブルニヒルデと聖マウリス修道院との関係は不明であるが、かの女の修道院および教会に対する姿勢は、かの女がルクスィーユ修道院からコロンバヌスを追放し、

反コロンバヌス派のラングル司教ミレティウス(Miletius)の甥、エウスタシウスをルクスィーユの院長に据えて、同修道院のフランク化を図り、反アイルランド修道制の姿勢を示しながら、オートン司教シャグリウス(Syagrius)を軸に教皇グレゴリウスとの関係を強化し、シャグリウスの協力をえて、オートンに聖マルティヌス教会、フランク人たちの貧教院(Xenodocium Francorum)およびその付属の聖アドキウス修道院(St-Andochius)、聖マリア修道院(Partheon stae-Mariae)を設立し、これら施設に教皇からの特許状をえており、かの女は一貫してブルグンド分国において親教会・修道院的、親教皇の姿勢をとっていた。<sup>13)</sup>

フランク王権と聖マウリス修道院との関係は、613年フランクの3分国を統一したクロタール2世以後は、フランク諸王の同修道院に対する特許状授与を媒介とした結びつきであった。クロタール2世の特許状は、第14代院長のセクンディヌス(Secundinus)に対しては、同修道院戒律の他者による不可侵であり、第15代のフロレンティウス(Florentius)に対しては、その条項に加えて、修道士たちによる修道院長の自由選出権の保証であった。

## 2) メロヴィング期における聖マウリスと教皇権

聖マウリス修道院と教皇権との関係は、史料のうえでは、7世紀中頃、同修道院に授与された教皇エウゲニウス1世(Eugenius I, 在位654-657)の特許状が最初であり、その文書の信憑性について、トゥリラもレイモンドも否定したが、<sup>14)</sup> アントンは同文書について多角的な分析を試み、確かに、文書の中心部分"dispositio"に記載されている10分の1税に関するカ所は挿入であり、神への呼びかけの部分"invocatio"と署名の形式についても、8世紀末期から9世紀に編纂上の改訂とみられるが、同文書はその現形態のうちに、多くの真正の要素が認められるとしている。<sup>15)</sup> 同文書の内容は、エウゲニウスが修道院長スタギルス(Stagirus)の聖マウリス修道院に対して、教皇庁の特許状をもって、かつて諸王が命令した諸規定、(1)外部からの修道院長の叙任の禁止と修道士団(congregatio)による修道院長の自由選挙、(2)当該管轄の司教権力の介入の禁止など、聖俗権力の外部からの修道院問題への介入を禁じている。<sup>16)</sup> したがって、エウゲニウスの特許状は、前出のクロタール2世の同修道院に対する国王特許状の確認文書とも言えるであろう。

## 3) 聖マウリス修道院とフランク聖界

同修道院とフランク聖界とを結びつける媒介は「詩篇の永続連続」と聖マウリス崇敬であり、この二つはブルグンド王国崩壊後も、なおも存続しつづけ、7世紀初頭までフランク支配に抵抗する旧ブルグンド勢力の精神的支柱となっていた可能性が想定しうる。<sup>17)</sup>

前稿で指摘したように、前出エウスタシウスで始まったアイルランド修道制のフランク化、すなわちイロ・フランク修道制とローヌ（プロヴァンス）修道制との接点は、ジュラ諸修道院との繋がりをもつロマンモティエ修道院(Romainmôtier)であり、<sup>18)</sup> 同修道院より南方には、イロ・フランク修道制の教勢はガロ・ブルグンド的教会勢力の反発に遇ひ、その伸長はみられない。聖マウリス修道院を巻き込むアグレスティウス(Agrestius)事件はブルグンドにおける両修道制の問題点を象徴的に提示している。

このアグレスティウス事件とは、ブルニヒルデの孫のテウデリヒ2世(Theuderich, 在位595-613年)の書記(notarius)を勤めたアグレスティウスが、ルクスィーユ修道院の伝道師(predicator gentium)としてバイエルンとアキレイアの伝道をおこない、アキレイアで「三章問題」の異端論争にかかわり、反教皇的態度をとった。この問題はアグレスティウスとエウスタシウスとの対立をうみ、前者はコロンバヌスの戒律への攻撃をおこなった。アグレスティウスを支援するブルグンド聖俗勢力は、かれの血縁者、ジュネーブ司教アブレヌス(Ablenus)とその近隣司教たち、この問題解決のためにマーコン教会会議(617-627年)を招集した反コロンバヌス派のリヨン司教トレテクス(Tretecus)、イロ・フランク修道制から離反したルミールモン修道院(Remiermont)設立者ロマリクス(Romaricus)と聖マウリス修道院からルミールモン修道院長に迎えられたアマトウス(Amatius)らであったが、かれらはイロ・フランク修道制のファルムティエル(Faremoutier)修道院設立者で、ブルグンドの有力貴族ブルグンドファラ(Burgudofara)の獲得には失敗した。<sup>19)</sup>

この事件はトレテクスとアグレスティウスの死去によって収束し、ロマリクスもアマトウスもエウスタシウス派に帰順したが、アグレスティウス派の勢力基盤が聖マウリス修道院設立にかかわったブルグンド教会勢力と約一世紀という時間的隔たりがあるにせよ、地域的に重なりあい、この地域はプリンツが描く地図では、590年から640年までのアイルランド修道制の影響の空白地帯となっていることが示唆的である。<sup>20)</sup>

#### a) 「詩篇の永続連禱」とフランク諸修道院

5世紀から8世紀中期まで、永続連禱の典礼をアガウヌ起源として受容したフランク諸修道院は、<sup>21)</sup> ブルグンド分国では、シャロン＝スュル＝ソーンヌの聖マルセル、ディジョンの聖ベニーニュ、ルミールモンなどの諸修道院に、ルクスィーユ修道院が加わる。先のアグレスティウス事件の際、「なぜなら、その時期にある事柄の怠りによって、ロマリクスとアマトウスはエウスタシウスによって非難された」<sup>22)</sup> との『コロンバヌス伝』が伝えるルミールモンとルクスィーユ両修道院間に起こった不和の原因について、L.ドゥブラツはルミールモン修道院による永続連禱の導入に求めているが、<sup>23)</sup> プリンツは同説を過剰解

釈として退けている。<sup>23)</sup> これについては、同典礼がルクスィーユ修道院にも導入されている事実から、プリンツが正しいと認められるが、しかし、この導入の時期がエウスタシウスがアマトウスに伴なって、ルクスィーユ修道院に赴いた時のことか、それともアグレスティウス事件終結後、アマトウスとエウスタシウスとの和解が成立した後のことか不明であり、直ちに判断しえない。ただし、プリンツは、レランス、ルクスィーユおよび聖マルセル諸修道院の同典礼の導入を記す修道院特許状が、650年頃作成のマルクルフ文書書式集からの単なる引写しの可能性も指摘しており、<sup>24)</sup> 実体は不明と言えよう。

ブルグンド分国以外の地域への同典礼の導入は、ネウストリア分国では、ダゴベルト1世(Dagobert, 在位623-638年)がその導入を命じたパリの聖ドニ修道院(St-Denis)、<sup>25)</sup> ルミールモン修道院からサラベルガが導入したラオンのサラベルジュ(女子)修道院(St-Salaberge de Laon)、プリンツがマルクルフ文書書式集からの転写を仄めかすソワッソンの聖マリア修道院、ソンム河口の聖リクイエ修道院(St-Riquier)、ルーアンのフェカンブ修道院(Fécamp)およびトゥールの聖マルティヌス修道院などであった。永続連禱の典礼はガロ・ブルグンドおよびフランク時代を通じて、セーヌ河以西のネウストリアとアキタニア、シャロン＝スュル＝ソーヌ以南のブルグンドおよびプロヴァンスには導入の痕跡はみられず、セーヌ河以西のネウストリアを除けば、同典礼の空白地帯は司教座をガロ・ロマン貴族勢力が独占していた地域と重なり合い、その原因がA.リィリィエの言うように、同典礼が余りにも人間の能力を過信した「霊性の機械的な勤行」にあったとすれば、<sup>26)</sup> それはガロ・ロマン的教養的聖界貴族層に浸透しえなかった理由と想定しうる。

#### b) 聖マウリス崇敬とフランク諸教会

聖マウリス崇敬、すなわち聖遺物の分与による同聖人の保護(Patrozinium)の享受という信仰形態の成立と流布は、エウケリウスの『アガウヌの殉教者たちの受難』が示すように、すでに同修道院設立以前に見られた。永続連禱と聖マウリス崇敬は双方の導入の時差が地域によって、流布分布図に現れている。プリンツの分布図(IVB)によれば、コロンバヌスのアイルランド修道制がフランク聖界に転換をもたらした590年以前に聖マウリス崇敬が導入された地域は、アウストラシアでは、トリアーのヴィクトール教会(バシリカ)とトゥール(Toul)の聖エヴル修道院(St-Evre)のモーゼルランドであり、ネウストリアでは、トゥール(Tours)、アンジェ(Angers)およびサンス(Sens)諸教会、ブルグンドでは、セムール教会(Semur)のバシリカ、オーセールの聖マウリス修道院のバシリカ、アルシス(Arcisse)の聖マウリス修道院およびヴィエンヌの聖シェフ修道院などであり、アキタニアでは、クレルモンとカオール両教会であり、プロヴァンスには、アルルの聖ヨハネ修道

院付属教会のみであって、アキタニアとプロヴァンスという教会設立密度の高い両地域には、わずか三教会のみであった。

注目すべきは、コロンバヌスのアイルランド修道制導入の590年以後は、聖マウリス崇敬と永続連禱が流布した地域にほぼ重なりを示すが、それも三つの地域に限られる。モーゼルランドでは、エヒテルナッハ修道院(St-Echternach)、プリュム修道院(Prüm)およびトーレイ修道院(Tholey)、マース河流域では、スタブロ＝マルメディ修道院(Stablo＝Marmedy)、ボーリュ修道院(Beaulieu)、ヴェルダンのエルブゥヴィーユ教会(Herbeuville)、ライン河流域のアルザス地域では、エベルスハイムミュンスター修道院(Ebersheimmünster)、聖ディエ修道院(St-Dié)、ムールバッハ修道院(Murbach)およびクルトテーユ修道院(?) (Courtetelle)、ライン河をさらに遡り、ライヘナウ修道院(Reichenau)および聖ガルス修道院(St-Gallen)であり、飛び地としては、ドナウ河流域のニーダーアルタイヒ修道院(Niederaltaich)が同崇敬を受け入れている。

プリンツは590年を境とする聖マウリス崇敬の発展段階の差をつぎのように解説する。590年、コロンバヌスによるアイルランド修道制の導入以前、すなわち6世紀間の同崇敬のひろがり、マルムティエ修道院のアキタニア修道制とレランス修道院のローヌ修道制の二つの古ガリア修道制の発展地域と重なり合い、北限がロワール河下流とセーヌ河上流地域であり、北部突出部がモーゼルランドであって、ローヌ修道制の伝播の限界がそのまま同崇敬の流布の限界となっており、それは古代都市文化域と一致する。そして、590年以後の同崇敬がこの限界を越えて、ガリア東北部と北部へと拡大するのは、6世紀間にローヌ地域がフランク国家の支配下に入り、ガリア東北部および北部のキリスト教化と再キリスト教化に道が開かれたからであった。<sup>27)</sup>

[注]

1) Besson, op. cit., p.132f.

2) L.Duchesne, *Fast episcopaux de l'ancienne Gaule*, Paris 1894, I, p.239; L.Ueding, op. cit., p.177.

3) H.Büttner, op. cit., p.175.

4) *ibid.*

5) 拙稿「教皇グレゴリウス一世のゲルマン政策—とくにメロヴィンガー・フランクにおける教皇・Primatusに関する政治的考察—」(その一) 名古屋大学文学部研究論集 LVII 1972, 143頁。

6) *Fredegarii Chronica*, III,68, MGH SSRM, II, p.111; Theurillat, op. cit., p.110. Büttner, op. cit., p.176.

7) 拙稿「教皇グレゴリウス一世のゲルマン政策」(その一) 152頁。

- 8) Fredegarii Chronica, IV,1, MGH SSRM, II, p.124.
- 9) Prinz, op. cit., p.104.
- 10) ibid., p.105.
- 11) 拙稿「Gunthramnusの統一政策と聖俗両貴族権力」名古屋大学文学部研究論集 L 1970, 111頁。同「クロタール二世およびダゴベルト一世の統一王権とアウストラシア支配」愛知県立芸術大学紀要15, 1986 参照。
- 12) 拙稿「教皇グレゴリウス一世のゲルマン政策」(その一) 154頁。
- 13) Theurillat, op. cit., p.86 ;Reymond, op. cit., p.86.
- 14) Anton, op. cit., p.149.
- 15) Rekonstruierter Text, ibid., p.22.
- 16) フランク勢力と旧ブルグンド勢力との抗争については、拙稿「クロタール二世およびダゴベルト一世の統一王権」参照。
- 17) 拙稿「ガロ・ブルグンド期のジュラ諸修道制—ジュラ諸修道院(コンダ・ラウコンヌおよびラ・バルム)をめぐる諸問題—」愛知県立芸術大学紀要25, 創立30周年記念号 1995, 参照。
- 18) 拙稿「コルムバヌス修道院運動—メロヴィンガー・フランクの政治的・教会的転換期に関する一考察—」名古屋大学文学部研究論集 LIII, 1971, 98頁。
- 19) プリンツの上掲書の付図VIIIB。
- 20) Theurillat, op. cit., p.104.
- 21) Nam eo in tempore ob quibusdam neglectis tam Amatus quam Romaricus ab Eusthasius obiurgati fuerant. Vita sancti Columbani, II,10, MGH SSRM, IV, p.127.
- 22) L.Dupraz, Regnum Francorum, S.307, Nr.2 u. S.308.
- 23) Prinz, op. cit., p.105.
- 24) ibid., p.106f.
- 25) Diploma Chrodovei II, (Ann.653), Pardessus, op. cit., II, p.99.
- 26) A.Rilliet, Conjectures historiques sur les humèlies prêchées par Avitus, évêque de Vienne, dans le diocèse de Genève et dans le monastère d'Agaune, dans Etudes paléographiques sur des papyrus du VI<sup>e</sup> siècle, Genève 1866, p.98 (Theurillat, op. cit., p.105)
- 27) Prinz, op. cit., p.111f.

## むすび

アガウヌの聖マウリス修道院の特性は、同修道院の設立の主体がブルグンド国王ジギスムンドとブルグンドのガロ・ロマン系の聖界貴族らとの合作であり、聖マウリス崇敬と東方教会から導入した「詩篇の永続連祷」とが同修道院成立の二つの核となっている。そして、この典礼を効率的に実施するために、ローヌ(プロヴァンス)修道制系のブルグンドの諸修道院から派遣された修道士たちの"turma"が設けられたことにより、聖マウリス修



道院は、複数の修道院の修道士グループによって構成されるという、当時としては類例をみない修道院組織をもつところとなり、その形態は聖マウリス修道院にレランスとルクスィーユ両修道院と並んで、メロヴィング・フランク期の規範修道院(Musterkloster)の地位を与えるところとなった。

プリンツが示した地図(IVB)によれば、聖マウリス修道院からガリア世界に放射された「詩篇の永続連祷」と聖マウリス崇敬との双方を導入したのは、ディジョンの聖ベニーニュ修道院のみであり、このことは聖マウリス修道院のこの二つの核が不可分のものとして結びついた存在ではなかったことを示している。

前章で指摘した聖マウリス崇敬と永続連祷の典礼の流布の仕方の偏りは、何を意味するのであろうか。プリンツはこのような流布の偏りをコロンバヌスの修道院運動に求めている。しかし、ここで、ひとつの政治史的解釈がゆるされるならば、6世紀末期から7世紀にかけて、ブルグンド分国はグントラムおよびブルニヒルデ以後、アウストラシア分国との併合により政治的緊を濃密に保っており、このことがこのガリア東北部への流布を促し、この偏りの原因となったのではないかと推察される。(1997.12. 1)